

学界の動向

「第79回日本寄生虫学会大会」を終えて

伊 藤 亮*

平成22年5月20, 21日、旭川市大雪クリスタルホールを会場として第79回日本寄生虫学会大会をお世話した。昭和61年(1986年)に第55回大会が北海道大学獣医学部の大林正士教授によって北海道大学(札幌)で開催され、24年ぶりの北海道での、また旭川では初めての大会開催となった。教室員全員がそれぞれの役割を分担し、手作りの学会を盛り上げたことにまず、感謝したい。

約300人近い参加者のもと、2日間朝から夕方まですべての発表を口演とした。若手研究者の研究推進、活性化を目的とする若手研究者ベストプレゼンテーション賞コンペを第1日目の午前の部に振り当て、出席者全員の投票により優秀賞3人を選出した。午後の部は昼食をはさんで、評議会、総会、表彰式、一般講演と続き、本大会の目玉である英国人研究者2名による特別講演を懇親会直前に実施した。2日目も学会員への公募提案に基づく2つのワークショップ(顆粒球-寄生虫感染における好酸球と好塩基球-, バイオイメージングによる寄生虫-宿主間の動態可視化の新展開)を夕方の閉会式直前の時間帯に実施した。特別講演2、ベストプレゼンテーション賞候補演題9、ワークショップ演題10、一般講演155、計176演題が発表され、充実した質疑応答が交わされた。多くの参加者からは最初から最後まで珍しく大会に参加したという感想が多く寄せられた。これは大会第一日目に比較的面白い発表が集中することを避けたプログラム作成の成果と判断している。内容が充実した口演が多く、また若手研究者、さらに海外からの留学生の発表も多く、国際色豊かな大会であった。プログラム委員会の委員の先生方に感謝である。

ベストプレゼンテーション賞コンペでは、マラリアをはじめとする原虫疾患から蠕虫疾患までを網羅する形で、分子生物学、生化学、免疫学、進化的成果が報告された。寄生現象、寄生虫の生存戦略と宿主の防御戦略のせめぎ合いが分子、遺伝子、自然免疫、新しいナチュラルヘルパー細胞の同定と寄生虫感染防御における機能、共進化といった観点から論じられた。投票により、慶応大学医学部の茂呂和世さん(The role of natural helper cell in *Nippostrongylus brasiliensis* infection) はじめ3人が受賞した。

特別講演者として、英国王立熱帯医学協会・前副会長、現WHO結核その他の治療薬評価委員会委員長、寄生虫学関係の専門誌 *Experimental Parasitology* 編集長の John R Horton 教授とサルフォード大学 Philip S Craig 教授(前WHOエキノコックス症非公式作業部会・部会長)に、それぞれ *Putting protozoan diseases into perspective as neglected diseases, Re-emergence of cestode zoonoses* と題する講演をお願いした。Horton 教授はケンブリッジ大学医学部卒業、外科医としての研鑽を積み、いくつかの若手外科医に与えられる賞を頂いた後、基礎医学、感染症、特に寄生虫疾患に関する治療薬開発に転向された。エキノコックス症の治療薬であるアルベンダゾール(エスカゾール)の開発責任者として有名であり、伊藤とは1993年以来旧知の仲である。

Craig 教授は獲得免疫機構におけるT細胞を発見した Graham F Mitchell 教授(メルボルン大学ワルター・エリザホール医学研究所寄生虫部・部長)、条虫感染におけるワクチン研究で有名な Mike D Rickard 博士(メルボルン大学獣医学部)と条虫感染免疫学に關す

*旭川医科大学寄生虫学講座

る研究を展開し、糸虫感染における疫学研究への免疫診断法の導入、特に糞便内抗原検出研究のパイオニアとして活躍してきている。伊藤がメルボルン大学に留学した1985年以降の研究仲間である。米国立衛生研究所 (NIH-RO1) 研究費「感染症の伝播生態、疫学研究：中国におけるエキノコックス症伝播生態、疫学研究」(2000年から5年+3年、計8年間)の代表者であり、伊藤は免疫診断、遺伝子解析の責任者としてNIH-RO1プロジェクトに参加した。現在も、NIH-RO1プロジェクトの総まとめ的な論文を共著論文として準備している段階である。また、伊藤が代表である幾つかの文科省、学術振興会研究費による「アジアにおけるエキノコックス症、囊虫症対策研究」にも協力者として参加しており、本年10月23日からの中国四川省チベット民の居住地域におけるテニア症、囊虫症疫学調査にも招聘する。

お2人には全く異なる寄生虫疾患、原虫病と蠕虫症それぞれについて地球規模での問題点を話していただき、参加者の認識、特に地球規模での問題点についての認識を新たにさせていただいたと確信している。

大会直前にアイスランドの火山噴火が深刻化し、イギリスのみならずヨーロッパ全域で空港閉鎖になり、特別講演者の来日が危ぶまれたが、Horton教授は予定通りにヒースロー空港を、Craig教授は1日遅れでリバプール空港発をマンチェスター空港発に切り替えて脱出できたことは奇跡的であった。旭川空港でお2人の元気な顔を見るまでは気が気でなかった。

会期をいつにするか、会場をどこにするか、参加会員数が何人ほどになるか等を教室員がシミュレーションし、その資料を学会理事会に提出し、大会費を決定した。晴れの日が多い平日(週末を旭山動物園を楽しんでもらう)という設定で、5月20、21日に大会を、20日夕方からの懇親会を北海道らしくバーベキュー主体に、クリスタルホール中庭(ただし、雨天の場合は変更)で実施することにした。しかし、20日当日

の朝方まで雨が残り、夕方の懇親会をホール中庭から屋内に場所を変更さざるを得なかったが、屋内会場に入りきれないほどの会員が参加し、盛會に終わったことも感謝である。吉田晃敏学長には、札幌出張直前の超多忙中、懇親会に参加していただき、歓迎の挨拶をしていただいた。ここに改めて御礼申し上げます。大会場の周辺にレストラン等が少なく、大会2日間とも、主催者側として弁当を参加者全員分準備したことも参加者から好評を得た。

2005年7月に文科省科学技術振興調整費により「エキノコックス症、囊虫症に関する国際会議」(旭川医科大学研究フォーラム 2005; 6 (1): 84-86; *Parasitology International* 2006; 55 Supplement: 1-312)を寄生虫学講座でお世話した経験が十分に活かされたと判断している。2010年から新たに振興調整費による「アジア・アフリカ科学技術協力の戦略的推進、国際共同研究の推進：難治性寄生虫病に関する遺伝子診断法の開発」が展開されることになっており、国際共同研究をさらに発展させ、同時に国内外で手作りの会議を計画しないといけない模様である。今回の学会主催の経験を基にこれらの会議も乗り越えられると信じている。

今回の大会開催にあたり、旭川で初めての寄生虫学会大会であったにもかかわらず、本学の先生方に招待状を差し上げることを失念したことは私の大失態であった。本学内での寄生虫学講座の研究・教育活動の重要性をさらにご理解いただくうえでも、また主に寄生虫学、熱帯医学を専門とする大会参加者の先生方と学内の先生方との旧交を温めていただく折角の機会を設営できなかったことをお詫びします。

難治性寄生虫疾患、特にエキノコックス症、脳囊虫症に関する *only one* の寄生虫学講座の継続的な総合的研究の展開を可能にした本学からの支援、特に久保良彦第5代学長並びに吉田晃敏第7代学長に感謝し、学会報告とさせていただきます。